コラム Column

# 町の商店街と商業民俗研究

韓　同春（北京師範大学大学院民俗学専攻院生）

日本のほとんどの町では、スーパーマーケットや、散在する店と駅の地下街のほかに、アーチ形の屋根付きの市場が見られる。様々な店に挟まれている道の上に、アーチ形の屋根をつけ、道を廊下のようにした市場ができる。この屋根は、雨や陽射しを防ぐほか、商品の衛生を保ち、それぞれ独立した店をひとつの有機体に纏めるなどの機能を持っている。このような市場は商店街と呼ばれ、人々の暮らしの中で、重要な商業活動の場所である。

商店街には、様々な店が集まっており、商品の種類もおびただしい。食料品や野菜、果物をはじめ、洋服や靴、電化製品まで、あらゆる商品が揃っている他、レストランやゲームセンターなどもある。

これらの商店街の多くは、長期にわたって形成され、歴史的・文化的意味が含まれている。地元の人々や行政機関は、商店街の古い風貌を保持し、買い物客と観光客を集める努力をしている。

筆者は、神奈川大学21世紀COEプログラムの招きにより、訪問研究員として日本で調査を始める際、重点的に中心都市の周辺にある村落の商業活動とその影響で変容してきた村落文化の形態を理解し、商業民俗の研究を行うつもりだった。けれども、日本の商業形態を実際に見ると、最も集中し活発なのは、町での商業活動であることがわかり、そのひとつである町の商店街を主な調査対象とした。民俗学の視点から商店街を考察することは、商店街とその周りの人々との関係及び商人たちの暮らしや考え方などを知る上で、重要な役割を果たせると思われる。「横浜の六角橋商店街が非常に面白いので、研究する価値がある。」（大意）という福田アジオ教授のご指摘により、滞在期間2週間の間に、筆者はその六角橋商店街及びその周辺と横浜中華街、京都錦市場、名古屋の商店街（駅の地下街）、大阪黒門市場などの商店街を調査した。そして、神奈川大学、東京都立大学、成城大学、京都国立歴史博物館などでは関連資料を調べ、現在の日本における町の商店街について、ある程度の認識を深めることができたと思う。

商業は、普遍的で重要な経済行為のひとつでありながら、人々の暮らし方そのもの、彼らが作り出し、伝承し、エンジョイしてきた生活文化でもある。商業民俗は、民俗研究の重要なテーマのひとつであり、その研究は容易ではない。中国で、その重要性は、既にたくさんの研究者に意識され強調された。現段階では、ある程度の成果があがっているが、研究をさらに深めて広げていく必要がある。現在、私の所属する北京師範大学大学院民俗学と文化人類学研究所では、商業民俗の研究がなされている。本研究所は、中国文化部の民族民間文化遺産保護プロジェクトに指定され、「北京商業民俗文化調査及び研究」に当たることになった。私の博士論文にも、商業活動と商家の生活などに関する内容が含まれている。

北京師範大学の民俗学研究は、中国で最も高いレベルを持っている。その多くは、「中国民俗学の父」と呼ばれる民俗学者鐘敬文の北京師範大学での半世紀以上の貢献のお陰である。鐘敬文先生は、若い頃から民俗学に精力を注ぎ、1949年9月、北京師範大学中文系の任に就いてから辞世まで、ずっと本大学で、民俗学の研究と教育のために努力し続けていた。そのご指導により、北京師範大学中文系・中国民間文化研究所には、優れた研究者が集まっており、学術的雰囲気が濃厚な研究機関となっている。数十年の間、民俗学の専門人材を輩出し、研究成果も非常に注目されている。

現在、民俗学は北京師範大学の重点学科に指定されており、大学院の下に、「民俗学と文化人類学研究所」および「民俗学と社会発展研究所」が設置されている。民俗学と文化人類学研究所の主な研究課題は、民間叙事学、民俗誌学、歴史人類学の三つであり、互いにつながり、「民間叙事と歴史記憶」の長期的研究方向を支えている。所長の劉鉄梁教授は、民間文学理論、民俗誌学、村落考察などの領域に、重要な貢献を果たしている方であり、2004年から、「中国民間文化遺産緊急保護プロジェクト」と「中国民俗文化志区縣本の調査及び編纂」に参加された。学生を連れて北京市門頭溝（もんとうこう）区に入り、地方の民俗協会会員や地元文化研究者とともに現地調査を行い、『中国民俗文化志（区縣本）』の第一集・『門頭溝区民俗文化志』を完成させた。編纂中、‘代表的な民俗を中心で纏める’民俗志編纂法」を創出し、それを『門頭溝区民俗文化志』の編纂に貫いていた。現在、『宣武（せんぶ）区民俗文化志』の編纂に着手している。歴史上、宣武区は北京の繁華街であるため、本民俗文化志の編纂は、商業民俗に深くかかわることが予想できる。

（韓同春氏は、2004年12月1日～12月14日訪問研究員として来日。）